

# 現代社会は「お節介乏症」 ～これでは生活を守れない～

関西福祉大学大学院社会福祉学研究科教授

小國 英夫

私は最近片道2時間半の電車通勤をするようになった。電車の中の風景を見ていると圧倒的に多いのは「個人的に楽しんでいる風景」である。イヤホンで音楽を聴く。携帯でテレビを観たり小説を読む。メールをする。ゲームをする等々である。殆んどの人がそうした機器類をもっている。実は私も最近「アイポッド (iPod)」を購入し音楽を楽しんでいる。みんな一人遊びが上手である。通勤電車の中だから仕方ないということではない。それ以外の場面でも「共に楽しむこと」が少ない。

近年は良い人間関係 (コミュニケーション) がつくりにくくなっている。お節介もしなくなっている。見て見ぬ振りも多い。家族ですら互いに学び合い助け合うことがなくなってきた。携帯やパソコンに代表されるコミュニケーションシステムが溢れかえっているが、コミュニケーションはできていない。「孤独なコミュニケーション」とでもいうべきか。そして少しでも面倒なことは「専門家に任せよう」か、「状況から逃避する (引き籠る)」ことが多い。要するに自分達 (家族、近隣、友人、職場の仲間等々) で取り組もうとはしない。それが自分にとって大事なことであったとしてもである。

消費者被害はそうした状況の中で増えることはあっても減ることはない。そのために防止策が次々と打ち出されるが決め手にはならない。肥大化したシステムを嘲笑うように被害が増加する。

消費者保護対策や個人情報保護、また成年後見制度等は確かに必要な制度でありシステムであるが、これらを使いこなす条件が整っ

ていない。その条件とは何か。それは多分「生活者ネットワーク」の形成であろう。家族、近隣、友人、職場の仲間等々が何でも向き合って話し合い、悩みを共有する関係がなければシステムや専門家の働きも空転するばかりである。介護保険のケアプランもケアマネさん任せではより良い助けにはならない。自分達のことは自分達で取り組むことが基本である。やはり現代社会は「生活者としての主体性」と、「助け合いのお節介」が欠乏している。

こうした欠乏の背景には生活者感覚よりも仕事の感覚に頼る「非生活者的思考」が見て取れる。すべてがビジネスモデルになっている。現代社会の深刻な問題である。

